



二葉亭四迷のツルゲーネフ作『あひびき』の翻訳について : オノマトペなどをめぐる二つの訳文に関する若干の考察

湯浅, 英男

(Citation)

近代, 109:35*-67*

(Issue Date)

2013-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005482>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005482>



二葉亭四迷のツルゲーネフ作『あひゝき』の翻訳について —オノマトペなどをめぐる二つの訳文に関する若干の考察—

湯 浅 英 男

1. はじめに— 通説と問題設定

言文一致体が二葉亭四迷や山田美妙に始まることについては、すでに多くの議論が尽くされ、彼らの個性的な生涯についても同時代の内田魯庵をはじめとして、多くの文人・批評家によって論評されており、現段階で今更何を問題にするのかといった感もなくはない。¹⁾ 明治20年(1887年)前後の近代的な日本語文体の成立過程については、翻訳を含め決して一直線に進んだわけではない。ただ近代の文体成立史を研究してきた山本正秀によれば、言文一致体の試みとしては明治19年前半に書かれ、最終的には未発表のままに終わった二葉亭四迷のゴーゴリの翻訳、脱稿し広告文まで出されたが未刊となった同じく二葉亭のツルゲーネフ『父と子』の翻訳が「他の誰よりも早い試みであった」(山本 1971:145)とされる。しかし当時の文人たちへの影響となると、二葉亭の上記翻訳後に出版された小説『浮雲』(第一篇、明治20年6月)以上に、その後の彼のツルゲーネフの翻訳文体が重要であり、この点は以下の柄谷行人でも共有されている。

- (1) 最初の言文一致の試みは、憲法が発布され議会が開始された明治二十年代初期になされている。その有名な例は、二葉亭四迷の『浮雲』(明治二〇—二二年)である。しかし、これは同時代にほとんど影響力をもたず、二葉亭自身も創作をやめてしまった。彼の「言文一致」の試みが真に影響力をもったのは、その翻訳、特にツルゲーネフの翻訳によって

である。鷗外や透谷のように、この時期の「内向的」作家らは文語体に向かったのであり、「言文一致」の運動そのものもすぐ下火になった。それが再燃しはじめたときは、すでに独歩が『武蔵野』を書いた時期、すなわち二十年代末である。そして、独歩が影響を受けたのは、二葉亭の『浮雲』ではなくツルゲーネフの『あひびき』の翻訳からである。(柄谷 2008:46)

同時代の文人の感じた二葉亭訳についての印象は、すでに中村光夫(1993:232)などによっても言及されているところであるが、本論でも蒲原有明と田山花袋の言葉を紹介しておこう。蒲原が二葉亭の名を知ったのは中学入学したての頃、『國民之友』に掲載された『あひびき』を読んだことで、その時の印象を次のように書いている。

(2) 巧に俗語を使つた言文一致體—その珍しい文體が耳の端で親しく、絶間なくささやいで居るやうな感じがされて、一種名状し難い快感と、そして何處か心の底にそれを反撥しやうとする念が萌して来る。餘りに親しく話されるのが譯もなく厭であつたのだ。(岩波文庫版『あひびき・片戀・奇遇』1955:209、なお蒲原の論評は坪内・内田編『二葉亭四迷』1909に基づく)²⁾

また田山花袋の書いた、二葉亭の『あひびき』訳への批評—これもしばしば引用されるものだが—は以下のものである。

(3) あの細かい天然の描寫、私等は解らずなりにもかうした新しい文章があるのかと思うて胸を躍らした。『あゝ秋だ！ 誰だか向うを通ると見えて、空車からぐるまの音が虚空にひびき渡った……』その一節が、故郷の田

舎の栖木の多い野に、或は東京近郊の榛の木の並んだ丘の上に、幾度
思ひ出されたことか知れなかつた。明治文壇に於ける天然の新しい見
方は、實にこの『あひびき』の翻譯に負ふところが多いと思ふ。(同上
1955:210、なお田山の論評の出典も同上)

田山花袋にとって(3)に挙げられた『あひびき』の訳文がいかに忘れられない
ものであったかを、橋本治は田山の長編小説『生』の一節に(普及している全
集本では第三十六章だが、初出の『読売新聞』(明治41年)の新聞小説では第
七十六章)、「闊々とした野の上に、秋近い白い雲が靡いて、榛の並樹で縁取つ
た田舎道を空車の音が高く響いた。」という表現があることを指摘し強調して
いる(橋本 2010:102)。また上記の柄谷の言葉にもある国木田独歩は、自身の
短編小説『武蔵野』の中に二度も二葉亭訳の『あひびき』を引用していること
で知られるが、橋本(2013:206f.)によれば、独歩はこの『あひびき』の「空車」
のテーマを、「大八車が二台三台と続て通る、其空車の轍の響が喧しく起りて
は絶え、絶えては起りして居る。」という形で『武蔵野』の中にも折り込んで
いるのである。ただ中村光夫(1993:233)も言うように、当時の作家たちが「ツ
ルゲーネフの短編にこれほど惹かれたのは、やはりその景色に『武蔵野』を感
じたから」というのも事実であろう。また内田魯庵の、「独歩一派の自然主義
運動は實にこの『あひびき』と『めぐりあい』とに発途しておる。短かい翻譯
であるが音だ翻譯界の新生面を開いたばかりでなくて、新らしい文芸の路を照
すの光輝ともなった」(内田 1994:26)との文学史上の評価は、自然主義小説を
二葉亭の翻譯した「ツルゲーネフの線上に発展した日本近代文学の主流」とす
る柄谷行人の評価と同一線上にある(柄谷 2008:102)。ただ国木田の小説を「自
然主義小説」と呼ぶかといった議論については、橋本(2013:207)のように「こ
こに『自然主義』という語を持ち込むのは、それ自体余分なのである」とする
見解もある。本論では、これ以上文壇における主義・思潮の議論に立ち入るこ

とはしない。

ここまで、二葉亭四迷の訳した『あひゞき』の言文一致体成立史上の位置づけに関する通説を略述してきた。ほぼ議論も尽くされているかに思える問題だが、本論においては主に以下の点についてまだ考察の余地が残っていると考え、それらについて幾らかでも分析を進めたいと考える。

- (4) a. 翻訳論においては通常「起点言語」（『あひゞき』ではロシア語）と「目標言語」（ここでは日本語）が視野に置かれるが、二葉亭のツルゲーネフの翻訳の議論では起点言語であるロシア語が全く出てこない。このことは問題とならないか（翻訳論については例えば、ウスティノフ 2008 等参照）。
- b. 上記の(2)の蒲原有明の評に「巧に俗語を使つた言文一致體」という言葉があるように、二葉亭訳においては「俗語」と呼ばれる表現が問題となる。起点言語のロシア語では実際これらの「俗語」はどのように表現されているのか。
- c. 『あひゞき』には旧訳（明治 21 年）と新訳（明治 29 年）があるが、上記の「俗語」に限っても、起点言語のロシア語を介し新・旧二つの翻訳を見た場合、それぞれの訳はどのように評価されるべきか。

当然この三つの視点は切り離して論じられるものではないが、従来の二葉亭の『あひゞき』の訳についての議論で最も欠けていたように思われるものは、「起点言語」であるロシア語がほとんど全く言及されていない点かと思われる。その原因をいくつか挙げれば、一つには、ロシア語を理解する批評家が、英語、ドイツ語、フランス語を理解する批評家に比べ少なかったことが挙げられよう。また二つ目としては、近代における日本の小説文体に二葉亭の『あひゞき』訳が影響を与えたという場合、そこでは二葉亭の訳文が問題となるのであり、ツ

ルゲーネフのロシア語自体が問題になっているわけではないということも挙げられる。また三つ目としては、(これについても引用されることの多いものだが)著名なロシア文学者である神西清が「二葉亭の翻譯態度—特にツルゲーネフの場合について—」(1949年執筆、1954年補筆)において、二葉亭のツルゲーネフの訳の特質について論じており、『めぐりあひ』の2箇所を取り上げ明治21年の旧訳と明治29年の新訳との比較を(ロシア語は挙げることなく)具体的に行なっている。ここで二葉亭の『あひゞき』の翻訳と『めぐりあひ』の翻訳の関係について述べておくと、『あひゞき』の翻訳は明治21年に出了雑誌『國民之友』の7月号、8月号に掲載されたもので、『めぐりあひ』の翻訳は同じ年の『都の花』の10月号から翌年1月号にかけて掲載されている。なおこれら二つのツルゲーネフの作品は共に明治29年の翻訳集『片戀』に収録されている。収録に際して共にかんがりの改訳が行われているが、両作品ともほぼ同時期の翻訳及び改訂ということになる。ロシア文学者の神西清は『めぐりあひ』(『片戀』収録時に『奇遇』と改題)の旧訳・新訳を比較して次のように論じている。

- (5) いま虚心にこの二つの譯文を並べ眺めてみると、舊譯の方が一見はるかに「ぎくしやく」してゐることは明らかだが、更にそれをツルゲーネフの原文に比べてみるに及んで、われわれはこの舊譯が、いかにして原文の文調や語脈の末々をまで移植しようかといふ、ただに先人未踏であるのみならず後人すら恐らく夢想だもしがたいやうな惨憺たる苦心そのまゝの具現であることを知つて、凄然たる感慨を禁じ得ないのである。
(神西、上掲論文、なお引用は『二葉亭案内』1954:106;下線は湯淺による)

上記の論評は、下線に見るように著名なロシア文学者がロシア語原文をも参照・比較しながら、『あひゞき』と同時期に二葉亭が翻訳・改訂したツルゲーネフの作品について一定の評価を下しているのであり、後の論者はもはやロシ

ア語を持ち出すに及ばないという考えに到ってもおかしくはない。しかし昨今の翻訳論の高まりの中で、起点言語であるロシア語をも再度視野に入れ（つまり (4a) の論点）、(4b) の「俗語」の問題や (4c) の新訳・旧訳の比較の問題を現代の視点から再検討する必要がある。本論は当時の文壇に少なからぬ影響を与えた二葉亭の『あひゞき』の翻訳を取り上げながら、上記の問題点の解明を一步なりとも進めることを目指したい。

2. 「起点言語」としてのロシア語、「目標言語」としての日本語

2.1 旧訳・新訳とロシア語原文の提示方法

二葉亭四迷の『あひゞき』の翻訳が当時の作家たちに、言文一致体や自然描写において影響を与えたことは事実であるが、ロシア語がその議論に全く出てこないのはやはり問題であろう。ここではまず田山花袋も引用していた有名な「あゝ秋だ！」で始まる一節を取り上げ、明治21年（1888年）の旧訳と明治29年（1896年）の新訳、さらにはツルゲーネフの原文（これには拙訳も付す）の本論での提示方法を示しておきたい（翻訳の末尾の数字は二葉亭1964及びツルゲーネフ1949それぞれの全集版の頁数）。なお以下で引用されるロシア語原文が大文字で始まっていない場合は、言うまでもなく文頭ではないことを意味している。

(6) (旧) ア、秋だ！誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響き渡った…… (169)

(新) 秋に違ひない！誰やら禿山むかふの向を通ると見えて、空車からくるまの音が高く響渡る…… (313)

(ロ) — признак осени! Кто-то проехал за
気配 - 主 秋 - 生 誰かが 通過した ~の向こう側に

обнаженным холмом, громко стуча

裸の 丘 - 造 大きな響きをたて 軋ませながら - 副動詞

пустой телегой... (206)

空荷の 荷馬車 - 造

(秋の気配! 誰かが木の生えていない丘の向こう側を、空の荷馬車の
車輪を大きく軋ませながら通過して行った)

本論は二葉亭の翻訳の誤訳探しを目的とするものではないため、ロシア語の逐語的な文法的注記については、構文理解のための最低限の情報提供にとどめる。ただ各単語の意味も付すことで、それぞれの単語の文法的な性格(動詞の時制等も含め)もある程度推測可能と考える。文法的説明としては、名詞については「主格」「生格」「与格」「対格」「造格」「前置格」という6つの格を、主、生、与、対、造、前という形で略記した(名詞に付加する形容詞も名詞と同じ格となるが、煩雑さを避けて形容詞の格については省略。また呼びかけの固有名詞については主格だが付記していない)。³⁾ なお代名詞の格については解釈上有益と思われる箇所での表示にとどめた。さらに動詞から作られる「能動形動詞」(これは英語等の付加語的用法の現在分詞に相当)、「被動形動詞」(これは付加語的用法の過去分詞に相当)については単に「形動詞」と記すと共に、動詞派生の副詞形である「副動詞」(これはいわば英語等の分詞構文で用いられる分詞に相当)についても付記しておく。同時にロシア語文全体に対し、文構造の理解に多少なりとも役立つよう拙訳も試みた。

そこで再度(6)の『あひゝき』の有名な翻訳箇所に戻るが、この表記の仕方は上記に述べたやりかたに基づくもので、本論の例文提示の範例となるものである。この1箇所のみで二葉亭の翻訳の特徴や、明治21年訳(=旧訳)と明治29年訳(=新訳)それぞれの特徴を抽出できるものではない。しかしとりあえずここでは有名な(6)を訳の典型例として見ながら、二葉亭の翻訳手法や新・

旧訳の特徴についてこれまで流布されている通説を以下で概観しておきたい。

2.2 二葉亭四迷の翻訳の特徴

二葉亭の翻訳の特徴として、一般によく知られていることはコンマ、ピリオドの一つまで疎かにしないという翻訳態度である。この点については二葉亭自身が「余が翻譯の標準」で述べていることであり、紹介しておこう。

- (7) されば、外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子に移さうとした。殊に翻譯を爲始めた頃は、語数も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏^{ひと}へに原文の音調を移すのを目的として、形の上に大變苦勞したのだが、さて實際はなかなか思ふやうに行かぬ。(二葉亭 1965: 174; 初出は明治 39 年; なお下線は湯淺による)

この二葉亭四迷の翻訳観については、内田魯庵の明治 42 年初出の「二葉亭四迷の一生」の中でも触れられている。これもしばしば引用される箇所であるが、ここでも紹介しておこう。

- (8) この(＝邦文としても読むに堪えないような、湯淺注)非芸術的濫訳横行の中であって、二葉亭の『あいびき』は殆んど原作の一字一句をも^{なおざり}等閑にしない翻譯文の新しい模範を与えた。後年盛んに翻譯し出した頃二葉亭は『あいびき』時代を追懷して、「あの時分はツルゲーネフを崇拜して句々皆神聖視していたから一字一句どころか言語の排列までも

原文に違えまいと一語三礼の苦辛をした、あんな馬鹿骨折は最もう出来ない、今ならドシドシ直してやる、」と笑った事があった。(内田 1994 : 25)

このあと内田魯庵は二葉亭の訳業について、「苦辛惨澹は実に尋常一様でなかった」(内田 1994 : 25) との感想を述べているが、当時二葉亭と交流のあった人物から見ても二葉亭の翻訳の苦労は並はずれたものと思えたのであろう。ただここではピリオド、コンマまで疎かにしない翻訳態度と共に、(7)の下線部に見るように二葉亭が「音調」を重視していることも見逃してはならない。これについては、中村光夫が二葉亭の伝記の中で、彼の学生時代における新内語りや清元といった俗曲への傾倒ぶりを語り、「この俗曲への愛着は、ある意味では彼の芸術観、文学観の根底をなした」(中村 1993 : 17) とまで述べていること、あるいは学生時代にニコライ・グレーに朗読でロシア語を習い、「朗読がすこぶる名人で、調子も面白い、節も面白い。真に妙を極めたものだ。」(中村 1993 : 57) と述べ、グレーの朗読を評価していることなどを踏まえれば、二葉亭の文学における「音調」重視の姿勢も十分納得のいくものである。

二葉亭の翻訳態度で重要な眼目となるのは、「音調」重視の姿勢と同時に、各作家の「詩想」が文体となって現われているという認識である。彼は同じく「余が翻譯の標準」の中で、「元来文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある」(二葉亭 1965 : 175) と一般論を述べた上で、さらにツルゲーネフの詩想と翻訳態度について次のように述べる。

- (9) 約言すれば、艷麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の當然の結果として、彼の小説には全體に其の氣が行き渡つてゐるのだから、これを翻譯するには其の心持を失はない

やうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在つては、徒らにコンマやピリオド、又はその他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先ず根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻譯するやうにせなければならぬ。(二葉亭 1965 : 175)

ここでは先のコンマ、ピリオド等、形式へのこだわりよりも、「詩想」を呑み込んだ上での翻譯の重要性を強調している点に注目する必要がある。中村光夫も二葉亭においては、「翻譯の目的は、この『詩想』を日本語によって再現するにあり、『形の上で』の苦心は、その目的に沿うたものでなければならぬとするのが、彼の主張し、実行したところ」として、「詩想」に着目している(中村 1993 : 230)。

ここで『あひゞき』の翻譯で有名な(6)に戻ろう。この場面はその直前に、飛んで来た鳩の群れが舞い上がって野原へと四散する情景(あとで例文(19)として挙げる)が描かれており、それを見ての「私」の内的な感慨の表明である。二葉亭の訳は、旧訳にしても新訳にしても、文構造に合わせた本稿筆者の訳と比べ、意味の正確さを保持したかなり思い切った訳と言える。最初にある признакは「気配」とか「兆候」という意味だが、この単語を訳さず、間投詞「あ」⁴⁾を使って「あ、秋だ!」と訳していることや、проехал (通過した)という主節の動詞を副詞句のように訳し、逆に副詞的な機能をもつ副動詞 стуча (響きを立てながら)を主節の動詞のように訳しているのは、日本語としてのリズムや「詩想」を考えてのことと推測する。旧訳・新訳の二つを具体的に比較・考察するあとの5.の中で、二葉亭の訳の特徴についてはさらに考えて行きたい。

2.3 旧訳・新訳についてのこれまでの議論

明治21年の旧訳と明治29年の新訳と読み比べると、あまり違いのない箇所も存在するが、用字法も含めて考えれば、かなりの書き換えが見られる。例えば上掲の(6)の翻訳でも、新訳の「秋に違ひない!」は旧訳の「ア、秋だ!」に比べるとかなり説明的な日本語になっている（但し訳の後半部には、それほどの違いはない）。この明治29年の改訳について中村光夫は明確に否定的な評価を下している。例えば次のように言う。

- (10) 明治二十九年の改訳はこの翻訳で彼が達成しようとしたところ（つまり、「心身を原作者の儘にして、忠実に其の詩想を移す」という態度、湯浅注）から意識して後退している点で、彼の青春をみずから否認したものと云えます。有明（蒲原有明のこと、湯浅注）の言葉をかりれば「能くこなれた俗語の適切なる使ひ振りと、能く曲げてしなやかに撓んだうちにも弾力性に富んだ句法とが互に絡んだ」新文体から、在来の日本語の文脈への妥協的復帰が見られ、多くの読者に耳障りな語法が消されている代わりに、旧訳に見られた清妙な主角も失われています。（中村1993：233f.）

従って(6)の箇所の改訳についても、「二葉亭は甲高すぎる抒情の調子を下げただけと思ったかもしれませんが、ここで若気の過ちとともに、彼の心のなかで、もっとも大切な何かは殺されたのです」（中村1993：234）と述べ、旧訳の方を二葉亭の「文学的青春の直截な現われ」（同上：233）として高く評価している。ただこれより前の部分で中村は、「たしかに後者（明治29年の訳、湯浅注）は日本文としてなだらかになって、読みよい代わりに、原作の味や調子がぬけてしまっていて、当時の文体の通念が古びてしまった現在から読むと、かえって前者より古臭く見えます」（同上：225）と述べ、新訳の「古臭さ」を指摘し

つつも、その読みやすさについては認めているように思われる。また神西清も二葉亭が『あひびき』と同時期に改訂した『めぐりあひ』の旧訳・新訳の評価に先だち、「初めの形にくらべて、改訂譯の方が遙かに簡潔でもあり流暢でもあるといふ例證などのために、この比較を持ちだしたのでは決してない」（神西 1954：106）と述べると共に、「舊譯と新譯との間の隔たり、これを言ひかへれば明治二十一年の口語概念と明治二十九年のそれとの間の驚くべき進歩の跡については、『あひびき』の譯文についても幾多の貴重な例證を擧げることができる」（同上：109）と述べており、明治 29 年の新訳については読みやすさ、簡潔さの点で一定の評価をしているとも言える。ただこの点については、具体的に旧訳・新訳を比べる中で検討してみたい（後述の 5. を参照）。

ただ中村の言うように明治 21 年の旧訳から明治 29 年の新訳への改訂を「後退」と見る場合、明治 20 年代の小説界における言文一致体を取りまく状況にも原因があったと推測される。柄谷行人は注（第 2 章の後注 4）で山本正秀の言葉、つまりこの時期は「とりどりの和漢洋俗諸体の配合による数種の折衷的新文体流行の時代であつて、そうした対立の中に明示的な普通文が模索されつつあったところの、いわば混沌期であつたのである」を引用しつつ、「一般には、明治二三年から二七年までは、言文一致の停滞期と目されている」と述べている（柄谷 2008:59）。こうした明治 20 年代の小説界の混乱状況が、二葉亭の『あひびき』の改訂にも影響を与えていることは想像に難くない。このことは旧訳・新訳の比較をする上では押さえておくべき事実であろう。

3. 「俗語の精神」について

二葉亭の旧訳に対する中村の(10)の評の中に、「能くこなれた俗語の適切なる使ひ振り」という言葉があるが、二葉亭が言文一致体で使う「俗語」については確認しておく必要がある。二葉亭は「余が言文一致の由来」の中で次のように言う。「僅かに参考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉とい

ふ奴だ。『べらぼうめ、南瓜畑に落ちた風ちやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな』とか、(中略)いかにも下品であるが、併しポエチカルだ。俗語の精神は茲に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。」(二葉亭 1965 : 172) 確かに東京語については、明治 21 年の旧訳ではそれほど目立たないにも拘らず、明治 29 年の新訳(二葉亭 1964)においては目につく。例えば新訳中の「さうさうは仕盡れるもんぢやねえ」(308)、「おれは大丈夫だ、忘れつこはねへー」(同上)、「お前だつて馬鹿ちやあるめえ」(同上)、「^{こは}破しちや^{いけねえ}不可ぜ」(310)、「^{わたしたち}どうでも私達の持つもんぢやないと^め見える」(同上)等には、式亭三馬の時代の江戸語の特徴、つまり連母音 [ai] や [ie] 等の [e:] への融合(松村 1957 : 205) が明らかに見られる。このように東京語の話し言葉を「江戸ツ子肌」(内田 1994 : 105) の二葉亭が参考にしている点は、紛れもなく「俗語の精神」の一つとして取り上げることができよう。だが、彼の言文一致体において誰もが言及するのは三遊亭円朝の落語の影響である。二葉亭が文章の書き方について教えを乞うために坪内逍遙の元を訪ね、「あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うか」と言われた話は「余が言文一致の由来」に書かれている有名な逸話である(二葉亭 1965 : 170)。そして逍遙に敬語のない方がよいと言われ敬語なしでやってみたのが、「自分の言文一致を書き初めた抑もである」(二葉亭 1965 : 171)、というのが二葉亭自身の自覚・認識でもある。当時速記術が発達し、円朝の落語も速記で記録されたものが出版されており(円朝の速記者として殊に名前が挙げられるのが若林珪造。円朝 2012 : 584 参照)、言うなれば話し言葉が書き言葉として印刷・出版されたことになる。ここでは円朝の話し言葉の特徴を探るため、カランコロンカランコロンと駒下駄の音と共に美しい幽霊が登場することで有名な『怪談牡丹燈籠』から一節(第 11 回の初めの部分)を取り上げ、話し言葉の実態の一側面を紹介しておく。

- (11) (…)此密談を孝助に立聞かれましたから どうがな工夫をして暇を
出すか殿様のお手打ちにでもさせる工夫はないかと いろいろと考へ
仕舞には勞れてとろとろ仮寝むかと思ふと フト日が覺めて 但見れば
二間隔つて居る襖がスウーと明きます 以前は屋敷方にては暑中でも簾
障子はなかつたもので 縁側は矢張り障子 中は襖で立て切てあります
るのがサラサラと明いたかと思ふと スラリスラリと忍び足で歩いて参
り 又次の御居間の襖をスラリスラリと明けるから お国はハテナ誰か
未だ起て居るかと思つて居ると 地袋のガタガタと音がしたかと思ふと
錠を明ける音がガチガチと聞こへましたから ハテナと思ふ内 ス
ウーツトンと襖をしめ ピシヤリピシヤリと裾を引くやうな塩梅で台所
の方へ出て往きますから (…)(円朝 2012: 67f; 下線は湯淺による)

ここでは特に擬音語・擬態語(下線部参照)が多い箇所を抜粋してみた(本論では以下、「擬音語・擬態語」のことを便宜的に「オノマトペ」と呼ぶことにする)。前田愛(2001)は二葉亭四迷の『浮雲』におけるオノマトペの多さに注目したが、それは『あひゞき』においてもあてはまる(本論では『あひゞき』の翻訳におけるすべてのオノマトペを取り上げることはできないが、後の5.で例示する旧訳・新訳を見ても、その多さは想像がつく)。それぞれの出版時期を見ても『浮雲』の第一篇が明治20年6月、第二篇が明治21年2月、さらに同年7月には翻訳『あひゞき』が雑誌に掲載され、再び『浮雲』の第三篇が翌明治22年7月から掲載開始という順になっており(野村 2013:232 参照)、『あひゞき』の文体が『浮雲』と共通性を持つことは十分推測可能である。オノマトペの使用状況に関し前田(2001:197)の論証をもう少し詳しく見れば、「十行につき擬声語・擬態語の数」が『怪談牡丹燈籠』においては2.9、『浮雲』第一篇が2.4であるのに対し(ただ第二篇、第三篇になるに従い1.9、1.0とやや漸減)、山田美妙の『武蔵野』は0.5、『胡蝶』は0.6である。つまり二葉亭の『浮

雲』のオノマトペの使用頻度は、言文一致体の創始者と並び称される山田美妙に比べてかなり高い（ただ美妙の『武蔵野』、『胡蝶』が歴史物である点は多少考慮の余地はあろう）。ここで前田愛の言いたいことは、「『浮雲』という作品は、高座で語られる人情噺のイキで、うけとめるのが本来の読み方なのではあるまいか。すくなくとも『浮雲』の文体が、語る文体、声を伴った文体であることを、もういちどあらためて確認する必要があるはしないか」（前田 2001：196）ということである。ここで議論を『あひゞき』に引き戻せば、語りの言葉、話し言葉としてのオノマトペを、二葉亭四迷は「音調」を移す翻訳の文体として十分活用したと見ることができる。

4. 『あひゞき』の時制と人称

ツルゲーネフの『あひゞき』は、言うまでもなくロシア語で書かれた小説であり、広い意味での「叙事詩」(epic)と見做すことができる。従って主語に呼応して人称変化する定形の動詞は、原則的にすべて過去形であり、その語尾は主語となる名詞の文法的な「性」・「数」、つまりは（単数名詞における）男性・女性・中性及び複数名詞に応じて、-л, -ла, -ло, -ли となる（例えば(6)的 проехал、あるいはあとの5.に挙げるロシア語例文を参照）。すでに紹介した「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず」といった二葉亭四迷の翻訳態度から見ても、基本的にロシア語の過去形は日本語のタ形で訳されている。そして小説の言文一致体におけるこのタ形に注目するのは野口武彦（1994）である（野口は文末詞「た」という言い方をしている）。野口は、「文末詞『た』は、日本語文法のカテゴリイ組織上もっぱら時制詞として取り扱われてきた。だが実際には、これは人称詞なのである」（野口 1994：225）とした上で、「近代小説の文末詞『た』は中立的な言語空間を存立させるための『三人称』の形態表示である」（同上：245）とする。そしてこの三人称が小説において持つ性格については次のように述べている。「三人称の成立は、前引した坪内逍遙の言葉

をくりかえせば、言語空間を『事実らしうもてなす』要請に依拠している。一人称には視界の限定があり、発話時点の制約があるのに対して、三人称は無限定・無制約であり、言表対象の客観性と定在性、言表行為の公正性と信憑性の外見を保持することができるのである。」(同上：234) 野口は自著の中でしばしばケーテ・ハンブルガー (Käte Hamburger) について触れているが、従来ハンブルガーの主張で問題となり、野口が言及していない事柄は、以下に見る過去形の表わす意味に関するテーゼである。つまり、「虚構的な語りの過去形と共に遂行され、虚構的な語りを極めて厳密に虚構的 (fiktional) だと証明するもの、あるいは別の表現を使えば、通常言われている『虚構的な私』は決して陳述主体 (Aussagesubjekt) ではないということを明らかに悟らしめるもの、それは実際逆説的な印象を与えるまさにあの意味変化なのである。そしてその意味変化とは、過去形が、過去のことを表示するという文法的機能を喪失するということに他ならない。」(Hamburger 1977: 60f.) 野口は「三人称は無限定・無制約」と述べているが、ハンブルガーの説に立つ限り、過去形も虚構的な物語では時間的には「無限定・無制約」なものへと変化することとなる。滝浦 (2013) は野口の議論を受けて、「野口は、三人称とは私でもあなたでもない誰か、いや、誰かというよりも誰の言葉でもない、つまり非人称の言葉だということを言おうとしている。話せる書き言葉の非人称性が獲得されてこそ、文が言と一致することになる。語りの一人称性が前面に出ているかぎり、それは言文一致ではないのである」と言う (滝浦 2013: 38)。野口の主張や、滝浦の野口の論の解釈 (一人称小説をどう位置付けるかの議論はひとまず置くとして) については基本的に的を射たもののように思われる。

野口によれば、『浮雲』で二葉亭がタ形を頻繁に使用したことは当時において「珍奇な印象」を周囲に与え、斎藤緑雨なども揶揄していたとのことだが (野口 1994: 234f.)、明治 21 年の『あひゞき』の訳も、『浮雲』の雑誌掲載とはほぼ同時期ということもあり (上述参照のこと)、やはりタ形が頻出している。た

だ『あひゞき』は多くの部分はヴィクトルとアクリーナという男女二人の登場人物で展開される三人称小説の如くに見聞を読んでいると思われるが、実際には明らかに一人称小説である。小説の書き出しは、Я сидел в березовой роще [...]. (私は白樺の林の中に坐っていた)であり、例えば二葉亭の旧訳の、「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。」と比べてかなり受ける印象も異なる。特に二葉亭は一人称の я を「私」ではなく「自分」と訳すため、なお一層一人称小説の印象は薄れる。⁵⁾ だが『あひゞき』が一人称小説の性格を保持していることについては、次の前田愛の説明が有用であろう。つまり前田は、『『あひゞき』の視点が『のぞき』という、一人称のうちでももっとも刺戟的な効果を持つ視点』であり、作者を「密会の場面を覗きみる」存在と考えている(前田 2001: 208)。この指摘を前述の野口の論と重ね合わせて見れば、『あひゞき』の二葉亭訳(とりわけ明治 21 年訳)はロシア語の過去形に呼応させてタ形を連続させることで無限定・無制約的な三人称小説を創出しているが⁶⁾、小説そのものの枠組みが典型的な一人称小説であるために、「読者は共犯者の立場に身をおくように仕組まれ」(前田、同上)しているのであり、(2)で引用した蒲原有明の抱いた「一種名状し難い快感と、そして何處か心の底にそれを反撥しやうとする念」も、ある意味文体上だけの問題ではなく、内容にまで関わってくる可能性がある。

5. 訳としてのオノマトペと間投詞—幾つかの例を取り上げて

5.1 フト

以下では、明治 21 年の二葉亭訳(旧訳)の『あひゞき』において使用頻度の多いオノマトペと間投詞を幾つか取り上げ、旧訳と新訳の差異や起点言語であるロシア語と旧訳・新訳の比較をケーススタディとして行なってみたい。オノマトペを取り上げるのは、上述したように二葉亭が三遊亭円朝の落語に頻出するオノマトペを「俗語の精神」の一つとして活用しているという理由からで

ある。また間投詞については、田山花袋が『あひゞき』の言文一致が与える「不思議な感じ」や「珍奇と驚異の感じ」の原因を、「あの？や！や、一の多い文章」に見て取ったからであり（田山 1983：6f.）、ここでは感嘆符と共に使用可能な間投詞を幾つか取り上げてみたい。

まず旧訳で最もよく使用されるオノマトペ「フト」（8回使用）について考えてみる。以下がその出現箇所である（以下、例文における下線は湯淺による。また適宜〔 〕で文脈を補足した箇所もある。引用頁数は二葉亭 1964、ツルゲーネフ 1949 の全集参照）。

(12) (旧) フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、(158)

(新) ふとまた彼處此處^{あちこち}一寸雲切がして、(304)

(ロ) то вдруг местами расчищалось
すると 突然に あちこちで (空が) きれいになった
на мгновенье. [...] (199)
～に 瞬時 - 対

(すると突然あちこちで一瞬空が晴れてきた)

(13) (旧) フト端然と坐してゐる人の姿を認めた。(160)

(新) ^{とみ}只見ると、^{わかふ}彼方に^{しよんぼり}悄然と坐つてゐる。(305)

(ロ) как вдруг глаза мои остановились
何と 突然に 眼 - 主 私の 止まった
на неподвижном человеческом образе. (200)
～の上で じっと動かない 人間の 姿 - 前
(何と突然に私の視線はじっと動かないでいる人の姿の上で止まった)

(14) (旧) フとまたガサガサと物音がした、(161)

(新) ふと又がさがさと音がする — (306)

- (口) Снова что-то зашумело по лесу.⁷⁾ (201)
 再び 何となく 物音がした ~じゅうで 森 - 与
 (再び森の至る所で物音がした)
- (15) (旧) フトまた萎れて、(161)
 (新) ふと復た萎れて、(306)
- (口) тотчас опять поникла вся, [...] (201)
 即座に 再び うなだれた すっかり
 (即座にまたすっかりうなだれた)
- (16) (旧) 「ヴキクトル」は泣くづをれた「アクーリナ」の背なかを眺めて、
 暫く眺めて、フト首をすくめて、身を轉じて、(168)
 (新) それを男は久らく起つて視てゐたが、軀て首を竦めて、ぐるりと
 背を向けて、(312)
- (口) Виктор постоял над ней,
 ヴィクトル - 主 暫く立ち止まった ~を見下ろし 彼女 - 造
 постоял, пожал плечами, повернулся [...] (205)
 暫く立ち止った すくめた 肩 - 造 向きを変えた
 (ヴィクトルは彼女を見下ろすように立ち止まり、暫く立っていたが、肩をすくめて向きを変えた)
- (17) (III) 「アクーリナ」はフト振りかへって自分の姿を見るや否や、忽ち忍
 び音にアッと叫びながら、ムックと跳ね起きて、(168)
 (新) 少女は自分の姿を見るや否や、急に力附いて、忍音に阿と云つて
 起上つて、(313)
- (口) но едва успела она взглядеться
 だが かろうじて ~する間があった 彼女 見入る
 в меня, как откуда взялись силы
 ~の方を 私 - 対 いかなる どこからか 生じた 力 - 主

— она с слабым криком
彼女 ～を伴って 弱々しい 叫び声 - 造

поднялась [...] (205f.)

立ち上がった

(だが彼女は私の方を見るや否や、どこからか力が湧いてきた—
彼女は弱々しい声をあげながら立ち上がった)

- (18) (旧) フト首を回らして、横目で自分をにらめて、(168)

(新) 首を振^{ねぢむ}向けて、自分の姿を視ると其儘、(313)

(口) [пролетел осторожный ворон,]

飛んで行った 牢獄にいるような ワタリカラス - 主

повернул голову, посмотрел на меня

向きを変えた 頭 - 対 見た ～の方へ 私 - 対

сбоку, [...] (206)

横から

([牢獄にいるかのような小心なワタリカラスが飛んで来て、]
頭の向きを変え、私の方を横から見た)

- (19) (旧) フト柱を建てたやうに舞ひ昇って、さてパッと一齊に野面に散ッ
た— (169)

(新) ふと棒の振れたやうに舞^{まひあが}昇^{そくさ}つて、倉皇^{のづら}と野面に降りた— (313)

(口) внезапно закружившись столбом

突然に ぐるぐる回り始めて - 副動詞 柱 - 造

хлопотливо расселось⁸⁾ по полю— [...] (206)

せわしなく 四散した ～の方面に 野原 - 与

([鳩の群れは] 突然ぐるぐると柱の如くに回り始め、せわしなく
野原へと四散して行った)

旧訳と新訳で音韻的に同じものとして現われるのは、(12)(14)(15)(19)の4例である。旧訳では(14)のみ「フト」の「と」が平仮名となるが、他のすべての旧訳は「フト」全体が片仮名書きされている。また逆に上記の4つの新訳はすべて平仮名書きという特徴を持つ。(14)における旧訳の「ガサガサ」、新訳の「がさがさ」でもわかるように、オノマトペの旧訳の片仮名書きは、新訳では平仮名書きに書き換えられる傾向が二葉亭には見られる。表記上の旧訳と新訳の違いは以上の点が最も目につくが、以下では「フト」がロシア語のどのような言語状況で生起するのかを少し考えてみたい。結論を先に言えば、下記のようなロシア語の状況下で二葉亭は「フト」を用いていることが推測される。

- (20) a. 「突然に」を意味する вдруг, внезапноがロシア語原文にある場合に、「フト」と訳されている。(12)(13)(19)を参照。
- b. 「フト」は訳語のレベルで「フトまた」という形で出現する傾向が見られる。実際ロシア語において「再び」を意味する снова, опять が出現するケースもある。(12)(14)(15)を参照。
- c. 身体の動き・変化の直前に「フト」が使用される。例えば пожать плечами (肩をすくめる), повернуть голову (頭の向きを変える) といった動作の直前などに使われる。(16),(18)の「フト」を参照。(17)の旧訳のように「振り返る」に相当するロシア語がないにも拘わらず、「フト振りかへって」と訳している場合もある。

二葉亭の「フト」の表記については、明治20年からの数年において揺れが見られる。明治20年6月『浮雲』第一篇では、「中背の男はふと立止まって」(以下岩波文庫版の頁数、14)、「ふと手を止めて」(25)、「ふと手近かにあった薬罐の白湯ゆを茶碗に汲取りて」(49)のように平仮名書き(以下同様に、述語の異なるものを3例ずつ挙げる)、明治21年2月の『浮雲』第二篇では、「フト

今年の春、向島へ^{さくらみ}観桜に往った時のお勢の姿を憶出し」(104)、「フトまた云合せたように」(113)、「然る後フト正眼を得てきて観ずれば」(125)のように片仮名書き、同様に明治21年7月の『あひゞき』の翻訳も上記のように片仮名書き、しかし明治22年7月に掲載開始となる『浮雲』第三篇では、「ふと水道町で一軒見当てた」(210)、「ふと心附いてみれば」(212)、「ふと轟いたお政の声に」(224)と平仮名書きに戻る。一般的に、「明治期は『書きことば』内に、『話しことば』で使われていたと思われるさまざまな語形が持ち込まれ、『書きことば』そのものが拡大していった時期」(今野2012:68)にあたり、これらの書記上の揺れは二葉亭自身の苦心のあととも言える。なお(19)の情景描写の箇所は文脈上、「ア、秋だ!」で有名な(6)の直前に位置する。

5.2 ブルブル(と)

旧訳におけるオノマトペの使用回数から見れば、程度副詞的な「ちっと(は)」が「フト」に続く4回となるが、ここでは出現回数が3回となる様態副詞的な「ブルブル(と)」について見てみることにする。以下がその出現箇所である。

(21) (旧) 一少女はブルブルと震へた。(161)

(新) 一少女は^{むすめ}慄然^{ふるふる}とした。(306)

(ロ) — она встрепенулась. (201)

彼女 激しく身震いした

(彼女は激しく身震いした)

(22) (旧) 「あした……オイオイ頼むぜ」ト男は忌々しさうに口早に云った、少女のブルブルと震へて差うつむいたのを見て。(162)

(新) 「明日だ……おいおい頼むぜ」、と少女の^{むすめ}慄然^{ふるふる}として、^{そつ}密と俯向いたのを見て、忌々しそうに、早口に云ふ。(308) (「ゝ」は白ゴマ点で、コロソ、セミコロソに相当)

(ロ) — Завтра... Ну, ну, ну, пожалуйста, —

明日 おい おい おい どうか

подхватил он поспешно и с

引き取った 彼 大急ぎで そして ～を伴って

досадой, увидев, что она

遺憾 - 造 見て - 副動詞 ～ということ 彼女

затрепетала вся и тихо

震え始めた すっかり そして ゆっくりと

наклонила голову: [...] (202)

傾けた 頭 - 対

(「明日 おい、おい、おい頼むよ」と、彼女がすっかり震え始め
頭をゆっくり前に傾けるのを見て、彼は大きく、しかも残念な
気持ちを持ちながら言葉を引き取った)

(23) (旧) 總身をブルブル震はして (167)

(新) 體はぶるぶる震へて、(312)

(ロ) Все ее тело судорожно волновалось, [...]

すべての 彼女の 身体 - 主 痙攣したように 波立った

(205)

(彼女の身体のすべてが痙攣したように震えた)

表記上の問題としては、旧訳はすべて「ブルブル」と片仮名が使用されているが、新訳では漢語の「慄然」に「ぶるぶる」と振り仮名が打たれている例が二つ、平仮名で「ぶるぶる」と書かれている例が一つある。オノマトベに関し片仮名書きから、振り仮名(平仮名書き)付き漢語への変更例は、他にも多い。例えば新訳においては、「^{そつ}密と」、「^{ちつ}些と」、「^{じつ}凝然と」、「^{きつぱり}爽と」等々が見られる。これは上述の2. 2で紹介した柄谷行人、山本正英の指摘にあるように明治20

年代半ばは「言文一致体の停滞期」であり、明治 29 年における二葉亭の中にもなお漢字・漢語で書くことへのこだわり、あるいは当時の小説界の風潮に押し流された側面も感じられる。また「ブルブル (と)」といったオノマトペは、ロシア語においては *встрепенуться* (激しく身を震わせる)、*затрепетать* (震え始める)、*волноваться судорожно* (痙攣するように波立つ) によって表現されるような「身体を激しく震わせる動作」に対し用いられていると言える。

5.3 ア!

田山花袋が二葉亭訳の『あひゞき』における疑問符、感嘆符、ハイフンの多さに「不思議な感じ」を抱いていたことは、5.1 で述べたが、言うまでもなく感嘆符は間投詞のみに使われたわけではない。『あひゞき』において「あした!」「大丈夫!」といった使用例もある。しかしここでは(6)の有名な「ア、秋だ!」に見られるような間投詞を扱ってみたい。まず間投詞としては3回と使用回数の多い「ア!」、及び形態的にはその変異形と見られる「ア、」と「アッ」(それぞれ各1回)も同時に取り上げる。すでに(6)で示した「ア!」の例を除き、以下に示す。

(24) (旧) ア、これはネ、お前さんにあげやうと思つて摘んで来たのですよ

(164)

(新) あ、これはね、お前さんに^あげやうと思つて摘んで来たの (309)

(ロ) А вот это я для вас, [...] (203)

ねえ ほら これ 私 ~のために あなた - 生

(ねえほら、これは私があなたのために摘んだのよ)

(25) (旧) 魂が止め度なく身をうかれ出て、男の方へのみ引かされて、甘へきつているようで—ア、よかった! 暫くして「ヴキクトル」は花束

を艸の上に取り落して仕舞ひ、(164)

(新) 魂が自然とあこがれ出て、男の膝に纏はるといひさうな風で、何
んとも言はず美しかつたのに、男は、何をするかと思へば、ワシリ
ヨークを草の上へ落して了つて、(309)

(ロ) вся душа ее доверчиво, страстно
すべての 魂 - 主 彼女の 信じ切つて 情熱的に
раскрывалась перед ним, тянулась и
現われ出た ~の前に 彼 - 造 引っ張られた そして
ластилась к нему, а он... он
甘えた ~の方に 彼 - 与 ああ 彼 彼
уронил васильки на траву,
うっかり落とした ヤグルマギク - 対 ~の上に 草 - 対
[...] (203)

(彼女のすべての魂は信じ切つて、情熱的に彼の前に現われ出て、
彼の方へと引きつけられ甘えた、ああ、彼は、彼はヤグルマギク
を草の上にうっかり落としてしまった)

(26) (旧) 「ア、ヴィクトル、アレクサンドルイチ、どうかして、一所に居
られるやうには成らないもんかネー」トだしぬけに云った。(165)

(新) しばらくすると、突如に、「あゝ、厭だ！ お前さんに別れちや一日
だつて辛抱が出来ない。」(310)

(ロ) — Ах, Виктор Александрыч, как это
ああ ヴィクトル・アレクサンドルイッチ どうして それ
будет нам быть без вас!
あるだろう 私たち - 与 いる ~なしで あなた - 生
— сказала она вдруг. (204)
言った 彼女 不意に

（「ああ、ヴィクトル・アレクサンドルイッチ、どうしてあなたなしで私たちが居られるなんてことがあります」と、彼女は不意に言った）

27 (旧) 忽ち忍び音にアッと叫びながら、ムックと跳ね起きて、木の間へ駈け入った、(168)

(新) 忍音に^{しのび}ア^{あつ}と云つて^{たちあが}起上つて、木の間へ隠れて了つた。(313)

(ロ) — она с слабым криком поднялась

彼女 ～を伴って 弱々しい 叫び声 - 造 立ち上がった

и исчезла за деревьями, [...] (205f.)

そして 消えた ～の向こう側に 樹木 - 造

(彼女は弱々しい声をあげながら立ち上がって、そして樹木の向こうに消えて行った)

旧訳と新訳の書記上の比較をすれば、同じ音韻上の対応物がある場合、旧訳の片仮名が新訳で平仮名となっている24、26や、漢語に振り仮名を付す形に変化している27の場合などが見られる。これらの変更は上述のオノマトベの旧訳・新訳の対比でも見られたものである。二葉亭において明治29年の新訳では、一般にオノマトベや間投詞の片仮名書きは避けられていると言える。また二葉亭訳とロシア語の間投詞の対応関係を見ると、大きく分けて訳に対応するロシア語に間投詞等がある場合と、ロシア語にそれらのない場合がある。ロシア語に対応する間投詞がない代表例が、すでに挙げた(6)の「ア、秋だ!」の場合である。また27の「アッと叫びながら」もロシア語には間投詞はなく、с слабым криком (弱々しい叫び声を伴って) となっている。逆に訳に対応するようなロシア語の語彙がある例は24、26で、а (これは「間投詞」ではなく、相手に行動を促したりする「助詞」) や ах (感嘆・悲嘆を表わす間投詞) が原文にはある。また特に注意すべきは25の例で、問題となる訳文は、旧訳で

は「ア、よかった!」、新訳では「男は、何をするかと思へば」である。これに対応するロシア語の箇所は、а он... (ああ、彼は...) となろう。このаは上記の「助詞」のаとは異なり、絶望・失望・嘆き・いまいましさを表わす「間投詞」と考えられる。従ってここでのа он... の表現は覗き見する「私」の落胆・失望の表われと理解すべきで、新訳の方が、多少説明的になっているとは言え、翻訳としては適当である。間投詞には日本語の音調、リズムを整える働きがあり、ロシア語において間投詞がなくても（ある意味、日本語のオノマトペ同様）訳文では比較的自由に使用しているとも言える。間投詞は二葉亭にとって、訳文の「音調」を整える道具立てでもあったのである。

5.4 アラ

間投詞の「アラ」も出現回数は3回であり、旧訳中の間投詞としては比較的多く使われている。また以下で見えるように書記上、旧訳の片仮名書き「アラ」は新訳では平仮名書きの「あら」に変更されている。この種の片仮名書きから平仮名書きへの変更は、オノマトペや間投詞の翻訳改訂に見られる二葉亭の一般的傾向である。以下、「アラ」が使われている3箇所を示す。

(28) (旧)「(…) — 泣く!」/「アラ泣はしませんよ」、トあわて、「アクーリナ」は云った、(162)

(新)「(…) — 泣く!」/「あら、泣きやしませんよ」、と周章^{あはて}て云って (308)

(口) — хныкать! / — Ну, не буду, не
すすり泣く まったく ない ~するだろう ない

буду, — торопливо произнесла Акулина, [...] (202)
~するだろう あわてて 言った アクーリナ - 主

(「(…) — 泣く!」/「エッ、私は泣かない、泣かないわ」と、
アクーリナはあわてて言った)

(29) (旧)「アラモウちッとお出なさいよ」ト「アクーリナ」は祈るやうに云った。(166)

(新)「あら、最う^{ちつ}とお出でなさいよ。」と少女は^{むすめ}拜むやうに云ふ。
(311)

(ロ) — Подождите еще немножко,
しばらく待ってください さらに 少し
— умоляющим голосом произнесла Акулина. (204)
哀願するような 声-造 言った アクーリーナ-主
（「もうちょっと待って下さい」と、哀願するような声でアクーリーナは言った）

(30) (旧)「アラかに……かにして頂戴よ」ト「アクーリナ」は早や口に云った、辛うじて涙を呑み込みながら。(167)

(新)「あら、堪^か忍^に……かにして頂戴よ」、と^{うろたへ}狼狽て云ふ、涙を飲込みながら。(312)

(ロ) — Не сердитесь, Виктор Александрыч,
ない 怒りなさい ヴィクトル・アレクサンドルイッチ
— поспешно прибавила она,
大急ぎで 付け加えた 彼女
едва сдерживая слезы. (205)
かろうじて 抑えながら-副動詞 涙-対
（「怒らないで、ヴィクトル・アレクサンドルイッチ」と、涙をかろうじてこらえながら、大急ぎで彼女は付け加えた。）

上記の「アラ」の場合、対応するロシア語がある場合とない場合がある。三つの内、(28)ではロシア語の ну が「アラ」に対応し、後続の表現の意味を強める助詞として働いている。他の(29)と(30)の場合には、むしろ「アラ」の出現状況

に共通性があり、共にロシア語の命令文（2人称の *вы* に対するもの）と関わって、何らかの行為・事態を要請する日本語の命令文の前に「アラ」を出現させている。当時の日本社会で、命令文・要請文などの直前でどの程度「アラ」が使用されていたかは綿密な調査を俟たないと正確なことは言えない。ただ二葉亭がロシア語との対応関係より、音調面を重視して「アラ」を使用した可能性はある。

6. おわりに — まとめにかえて

本論の出発点は、言文一致体の成立に二葉亭四迷の『あひゝき』の翻訳が大きな影響を与えたとされるにも拘わらず、その議論の俎上に翻訳の起点言語であるロシア語がこれまでほとんど載っていないことにあった。従って、旧訳と新訳の比較にとどまらず、起点言語であるツルゲーネフのロシア語を含めた形で二葉亭の旧訳・新訳の比較を一部であっても行ない、それぞれの訳文の特徴を明らかにすることを本論の主な目的とした。その際、二葉亭が「俗語」を訳文に取り入れていることはよく知られた事実のため、幾つかのオノマトベと間投詞を俗語として取り上げ、どのようなロシア語表現のもとで、あるいは現実の状況下でそうしたオノマトベや間投詞が使用されるのかその一端を探ってみた。またそれらオノマトベや間投詞の表記上の問題としては、明治21年の旧訳において片仮名書きであったものが、明治29年の新訳では平仮名書き乃至は漢語に振り仮名を打つ形式に変化していた。とりわけ漢語に振り仮名を付す形式は、言文一致体成立の流れから見れば、口語の話し言葉から文語の漢字仮名交じり文へと逆行しているとも見做せるものである。こうした漢字・漢語の使用についての揺り戻しは、2.2でも述べたように明治20年代半ばの小説界の文体的風潮から二葉亭がたぶんに影響を受けた可能性も否定できない。ただ明治期一般の時代の風潮として、江戸時代から脈々と続く漢字・漢語の使用への強い文体的書記的指向があることも事実であろう。柄谷行人（2008：49）は

前島密が慶応2年(1866年)に徳川慶喜に提出した建白書『漢字御廃止之議』を評価して、「言文一致の運動が根本的には文字改革であり、漢字の否定なのだということを明確に示している」と述べている(この建白書については、山本 1971: 63ff. も参照)。漢字の否定だけが言文一致体のすべてではないにしろ、多くの同時代の知識人同様、漢学塾で漢学を修め、「生涯を通じて彼の教養の素地をつくったものは漢学」(中村 1993:29)と見做せる二葉亭にとって、表記における漢字・漢語の克服は西洋の外国語の習得とはまた別の難しさがあったのかもしれない。本論は最初に掲げた(4)の問題点に対し部分的に足を踏み入れたに過ぎないが、今後さらに包括的な分析方法について模索してみたい。

注

- 1) 内田魯庵は二葉亭四迷について簡潔な評伝や思い出を書き残しているし(『新編 思い出す人々』参照)、中村光夫の『二葉亭四迷伝』も二葉亭を扱った評伝の古典と言ってもよい。また山田美妙については、嵐山光三郎の『美妙 書齋は戦場なり』(2012)のような評伝小説も最近出版されている。二葉亭等が作品を世に出し始めた明治20年代は、小説家という社会的地位もまだ十分確立されているとは言えない。子供の時から「維新の志士肌」(二葉亭 1965:265)を持ち、『浮雲』執筆後一旦は実社会へと入っていく二葉亭四迷や、小説だけではなく文法論や辞書の執筆などにも取り組んだ美妙の波瀾に満ちた生涯について、単なる随想にとどまらず、当時の社会状況を取り込んだ「伝記」や「評伝」までもが書かれるのはある意味当然かもしれない。
- 2) 明治時代の文献などで使用されている常用漢字でない漢字の字体については、読みやすさを考慮して、現在一般的に通用している漢字の字体に改めた箇所がある。本論の以下で挙げる二葉亭四迷の翻訳文なども同様。また同様に、本論は横書きのため、複数の文字にわたる反復符については用いず、読みをそのまま平仮名・片仮名で表記した。また原文にある振り仮名は煩雑さを避け適宜省略した箇所がある。
- 3) ロシア語の生格の用法は多様であるが、概ね印欧諸語の「属格」に相当すると見て

よい。また造格についても、「手段」を表わしたり、動詞の要求する補語として「動作の対象」を表わしたり、種々の用法を持つ。なお前置詞はその種類・用法に応じて、主格以外のすべての格を要求する可能性を持っている(和久利 1976、宇多 2009 等参照)。

- 4) 感動の発露に使う語彙や呼びかけ・応答などに使う語彙(いずれも活用はない)については、品詞論上「感動詞」という用語を使う場合もあるが(例えば『岩波国語辞典第七版』の「品詞概説」参照)、本論では「間投詞」を用いておく。
- 5) 日本語の「自分」は、旧軍隊で一人称の代名詞として使うことはあったが、一般には「彼は自分で言ったくせに何もしない。」のように「その人自身」を意味する(『岩波国語辞典第七版』参照)。
- 6) 明治 29 年の『あひゞき』の新訳では、旧訳に比べ文末のタ形はかなり減少している。このことは近藤(2012:210f.)の部分的な抜粋箇所分析(タ形が 7 箇所から 1 箇所に減)や、本稿のあとの部分で提示する(14)、(29)等の新訳・旧訳の対比を見ても推測可能である。ただ日本語の小説において、文末のタ形がロシア語同様に虚構的な物語の世界を形成するのに不可欠かどうかは、二葉亭の翻訳時点のみならず現在においてもなお議論のあるところであろう(湯淺 1998 も参照)。
- 7) (14)の旧訳・新訳においては、ロシア語原文の по лесу(森の至る所で)が訳出されていない。それは日本語の訳文全体のリズムに二葉亭が配慮したためか、文意から見てあえて訳出することに意味を見出さなかったためか、あるいは単純な訳し忘れのためであろう。
- 8) 全集版の расселось は рассеялось の誤植と思われる。よって рассеяться по полю は、新訳のように「野面に降りる」と訳すより、旧訳のように「野面に散る」と訳す方が適当であろう。

参考文献

- 嵐山光三郎(2012):『美妙 吉斎は戦場なり』中央公論新社。
ウスティノフ、ミカエル(服部雄一郎訳)(2008):『翻訳—その歴史・理論・展望』クセジュ

文庫.

内田魯庵 (1994) : 『新編 思い出す人々』紅野敏郎編, 岩波文庫.

柄谷行人 (2008) : 『定本 日本近代文学の起源』岩波現代文庫.

近藤昌夫 (2012) : 「遍在する「郊外」」, 内田慶市他『文化の翻訳あるいは周縁の詩学』水声社,
185-220 頁 所収.

今野真二 (2012) : 『百年前の日本語—書きことばが揺れた時代』岩波新書.

三遊亭円朝 (2012) : 『円朝全集 第一巻』岩波書店.

神西清 (1954) : 「二葉亭の翻譯態度—特にツルゲーネフの場合について—」(1949 年執筆,
1954 年補筆), 二葉亭四迷『二葉亭案内』岩波書店, 93-111 頁 所収.

滝浦真人 (2013) : 『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店.

田山花袋 (1983) : 『明治大正文学回想集成 3 近代の小説』平岡敏夫監修, 日本図書セ
ンター (原本の初版は 1923, 近代文明社).

坪内逍遙・内田魯庵 (編) (1909) : 『二葉亭四迷』易風社.

Тургенев, Иван Сергеевич (1949) : И. С. ТУРГЕНЕВ. СОБРАНИЕ
СОЧИНЕНИЙ. ТОМ 1. Москва: ИЗДАТЕЛЬСТВО „ПРАВДА“.

中村光夫 (1993) : 『二葉亭四迷伝』講談社文芸文庫.

野口武彦 (1994) : 『三人称の発見まで』筑摩書房.

野村剛史 (2013) : 『日本語スタンダードの歴史—ミヤコ言葉から言文一致まで—』岩波
書店.

橋本治 (2010) : 『言文一致体の誕生 失われた近代を求めて I』朝日新聞出版.

—— (2013) : 『「自然主義」と呼ばれたもの達 失われた近代を求めて II』朝日新聞出版.

Hamburger, Käte (1977) : Die Logik der Dichtung. 3. Aufl., Stuttgart: Klett-Cotta.

二葉亭四迷 (1954) : 『二葉亭案内』岩波書店.

—— (1964) : 『二葉亭四迷全集 第一巻』岩波書店.

—— (1965) : 『二葉亭四迷全集 第五巻』岩波書店.

—— (2004) : 『浮雲』岩波文庫.

二葉亭四迷（訳）（1955）：『あひゞき・片戀・奇遇』岩波文庫．

前田愛（2001）：『近代読者の成立』岩波現代文庫．

松村明（1957）：『江戸語東京語の研究』東京堂．

山本正秀（1965）：『近代文体発生の史的研究』岩波書店．

———（1971）：『言文一致の歴史論考』桜楓社．

湯淺英男（1998）：「過去形の文法的機能について―語りと時制のあいだ―」，神戸大学

ドイツ文学論集刊行会（編）『ドイツ文学論集』第27号，27-60頁 所収．

文法書

宇多文雄（2009）：『ロシア語文法便覧』東洋書店．

和久利誓一（1976）：『入門ロシア語文法』第12刷，白水社．

辞書

木村彰一他（編）（1975）：『博友社ロシア語辞典』博友社．

東郷正延他（編）（1988）：『研究社露和辞典（携帯版）』研究社．

西尾実他（編）（2009）：『岩波国語辞典第七版』岩波書店．

八杉貞利（1965）：『岩波ロシア語辞典 増訂版』岩波書店．

（ゆあさ・ひでお 言語学）